Osaka University Knowledge Archive

Title	日本書紀の用字の研究
Author(s)	朴, 美賢
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46577
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【4】

氏　　名	朴（パク）　美（ミ）　賢（ヒョン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９７８６　号
学位授与年月日	平成 17 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**日本書紀の用字の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　蜂矢　真郷 （副査） 教　授　後藤　昭雄　　助教授　岡島　昭浩

論文内容の要旨

本論文は、日本書紀における用字、とりわけ、類義字について、日本書紀の中でどのように使い分けられているか、巻の差、神代紀における本書と一書との差、系譜記事と非系譜記事との差、地の文と会話文との差などによる使い分けの状況を明らかにしようとするものである。

第一編「和習による用字ー尊称を中心に」は、第一章「「尊」「命」の考察」、第二章「「姫」「媛」の考察」、第三章「「皇」「王」の考察(1)」、第四章「同(2)」からなり、第二編「和習を含む用字ー人称代名詞を中心に」は、第一章「「吾」「我」の考察」、第二章「「汝」「爾」「儞」の考察」、第三章「「兒」「子」の考察」からなり、冒頭に「はじめに」を、末尾に「おわりに」他を付す。（400 字詰換算約 440 枚）

本論文は、漢語・漢文の誤用・奇用などに限らず、日本語の発想による漢語・漢字の用法を「和習」とし、「和習」による用字の使い分けを第一編でとり挙げ、一見中国の用字法によると見られるが「和習」を含んでいる用字の使い分けを第二編でとり挙げる。

そして、第一編では、尊称を中心とする用字として、「尊」「命」、「姫」「媛」、「皇」「王」をとり挙げる。「尊」は「至貴」に、「命」は「自餘」に用いると日本書紀に記されているが、巻による差があり、巻によっては非系譜記事にのみ用いられ、その巻による差は、「書紀区分論」のα群・β群の差とは異なることを明らかにしている（第一章)。「姫」「媛」の使い分けは、「尊」「命」と異なり日本書紀に記されておらず、本居宣長は、「皇胤」に「姫」を、「他姓」に「媛」を用いるとするが、「書紀区分論」とは異なる巻の差があり、「姫」から「皇女」への変遷が見られることなどを明らかにしている（第二章)。また、「皇」「王」について、天皇の子に対して用いられる際に、系譜記事には「皇子」「皇女」、非系譜記事には「王」が用いられることなどを明らかにしている（第三章・第四章)。

第二編では、人称代名詞を中心とする用字として、「吾」「我」、「汝」「爾」「儞」、「兒」「子」をとり挙げる。この編でとり挙げるものは、中国における差もあり、「書紀区分論」のα群・β群の差のあるものが中心となる。一人称を示す「吾」「我」は、漢籍と同様に「我」が目的格に多く用いられることを明らかにし（第一章)、二人称を示す「汝」「爾」「儞」は、「儞」が卑称を表すことや、β群の中で「汝」を「等」とともに用いるなど和習の例のあることを明らかにし（第二章)、また、「兒」「子」は、「兒」がβ群の系譜記事に多く用いられていることを明らかにしていて（第三章)、中国の用法の差を反映しているものと、和習によるものとの両方がいろいろ見られることを明らかにしている。

このように、日本書紀における類義字の使い分けについて、多くのことを述べている。

論文審査の結果の要旨

上代の散文の用字の研究は、従来、古事記についてのものが中心で、日本書紀についての研究は遅れていたと言える。また、上代文学などからの研究に比べて、国語学からの検討も遅れている。そして、近年の日本書紀の用字の研究は、「書紀区分論」のα群・β群などの差に基づくものや、漢文助辞や敬語補助動詞字を対象とするものが多いのであるが、本論文は、「書紀区分論」とは異なる巻の差もあることを明らかにしていることが評価されるところであり、尊称や人称代名詞という、従来の検討がどちらかと言えば個別的であったものを研究対象とし、それらを総体としてとらえようとしていることも評価されてよいであろう。

第一編に指摘されるところの巻の差は、第二編に検討される「書紀区分論」による巻の差と異なっており、また、検討対象によって巻が異なることも多くて、それが何によるものであるかを明らかにすることは決して容易ではないと見られるが、むしろ、それを明示したことに意味があると言える。

「尊」は「至貴」に、「命」は「自餘」に用いると日本書紀にある注は、全巻に対するものとは見られないことを明らかにしたり、人代の女性に用いられる「命」は、皇后であることより天皇の母であることが優先されていることを明らかにしたことは特に注意されてよい。「姫」から「皇女」への変遷の指摘も、重要であると言える。

また、「書紀区分論」のα群・β群の差のあるものについて、α群の中で「我」が目的格に多く用いられるなど、中国での差をある程度反映していることを指摘するとともに、β群の中で「汝」を「等」とともに用いるなど、和習と見られるものがいろいろあることを指摘していることも重要である。「吾兒」と「我子」との使い分けなど、章を越える検討もあり、研究の今後への発展が期待されもする。

一方、それぞれの章における検討は着実であると言えようが、全体的にとらえる見方は必ずしも十分であるとは言えないところがある。巻の差、神代紀の本書・一書の差、系譜記事・非系譜記事の差、地の文・会話文の差などは、互いにどのような関係になっているのか、もう少し全体的な追究がほしいところである。異例の検討において「編纂過程」の問題を挙げるところには、「編纂過程」が十分に明らかになっているとは必ずしも言えない状況において、今少し慎重な姿勢がほしいところである。

しかしながら、本論文は、日本書紀における類義字の使い分けについて、従来、知られていなかったこと、明確ではなかったことを多く明らかにしていて、価値あるものと言える。

なお、2005年7月22日、本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。

以上のようであるので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。